お茶目機能

春待ち　りこ

お茶目機能

「我が社の家事ロボット
　T3の使い心地はいかがですか？」

「よくやってくれてるよ。。。
　家事は完璧だ。
　でも、ちょっと。。。
　いや、いいんだ。忘れてくれ。」

「どんな些細なご不満でも
　出来る限り対処させていただきますよ。
　ぜひ、おっしゃってください。」

「あの。。。
　こんなことを言っては申し訳ないんだけど
　完璧。。。すぎるんだ。
　間違うことなど決してない。
　何か失敗するとしたら、僕の方ばかりで
　それって、本当に機械と暮らしてるという感じがして
　ちょっと、虚しくなる時がある。
　まぁ、ロボットなんだから当たり前なんだけど。」

「そういうことでしたか。
　ご安心ください。
　実は。。。そんなふうにおっしゃる方、
　結構いらっしゃるんですよ。
　ですから、我が社のロボットには
　『お茶目機能』がついております。」

「お茶目機能？」

「はい。。。
　任務の成功率を９５％に下げる機能です。
　時々、失敗しますが
　それさえご了承いただければ
　より人間に近い感覚の
　家事ロボットがお使いいただけます。」

「そんな機能がついているのか？
　ぜひ、頼むよ。。。
　多少の失敗など、気にしないから。」

「ありがとうございます。
　それでは、『お茶目機能』の設定をしておきますね。
　また、何かありましたら
　なんなりとお申し出ください。」

話は、一ヶ月前に遡る

男が命より大切にしていたカップを
妻が、割ってしまった
いつもドジばかりする妻

でも、今度という今度は

男の堪忍袋の尾は切れた

「出て行け！！！
　いますぐ、この家から出て行け！！！」

男はそう叫んで妻を追い出した

たかが、カップを割ったくらいで。。。
と思われる人もいるだろうが
このカップの代わりは
どこにもない

男にとって
それほど大切にしているカップだったのだ

妻を追い出した男は
家事ロボットを購入した

『タイプ　Ｔ３』

それが、彼女の名前だ
彼女は本当によくやってくれる

「あら。。。
　卵焼き、焦がしちゃったわ。
　私って、本当にだめね。」

そう言って、ぺろっと舌を出す
その仕草がなんとも言えず可愛い

Ｔ３に『お茶目機能』を設定してから
失敗もするようになったが
こんな可愛い失敗なら
大歓迎。。。だ

なんと言っても、追い出した妻は。。。
この１００倍は失敗していたのだから
多少のことでは驚かない

むしろ、気持ちが和らぐ

男は、この機能に充分満足した

「君がいれば、妻などいらないな。」

本気で、そう思うほどに。。。

●　●　●

ある夜。。。
男は、物音で目を覚ました
リビングの方から

ゴゴゴゴゴゴゴゴ
確かに音がする

Ｔ３は、充電中なので
動いているはずがない

ってことは。。。泥棒？

慌ててリビングへ向かった

「誰だ？」

男がそう言いながら、リビングの明かりをつけると
そこには、ナイフを持った見知らぬ男がいた

「静かにしろ。
　殺されたくなければ、金を出せ。」

男は、焦る

強盗だ。。。どっ。。。どうしよう。。。

腕力には自信がなかった

そうか。。。
ウチにはＴ３がいるじゃないか

部屋の隅にある防犯スイッチを押せば
緊急モードになって
充電中の深夜でも起動するようになっているはずだ

すぐに、防犯スイッチを押す

すると、彼女は現れた
まるで、こども向けテレビ番組の
正義のヒーローみたいに。。。

「どうなさいましたか？だんな様。
　あっ、強盗ですね。
　私におまかせください。」

こういう時のロボットは
なんと頼もしいのだろうか
この状況で。。。笑顔

ロボットなら、
ナイフで刺されて死ぬこともないだろう
もう安心だ。。。

男は、ほっと胸をなでおろす

次の瞬間。。。
Ｔ３は、リビングにあったソファを
軽々と持ち上げ
強盗めがけて投げつけた！！！

。。。はずだった

。。。はずだった

だが、ソファは。。。
なんと、男に向かって飛んできたのだ

こんな時に。。。
お茶目機能が。。。

「あら。。。ごめんなさい。
　手が滑っちゃったわ。」

Ｔ３は、そう言いながら
いつものようにぺろっと舌を出した

男は。。。
その愛らしいであろう彼女の表情を
見ることができなかった

なぜなら、ソファが命中してしまった男は
打ちどころが悪く
もう。。。死んでしまっていたのだから

●　●　●

契約者の生体反応がなくなり
Ｔ３は、まったく動かなくなり
その場で倒れていた

そこに現れたひとりの女

「自分のロボットに殺されるなんて
　本当にドジね。」

男の死体を見ながら、クスリと笑う

「私のことをドジだの注意力が足らないだの
　散々罵ったあげくに追い出した報いだわ。
　よくやったわね。。。Ｄ３。。。」

そう言って彼女はナイフを持った強盗の肩を叩いた

女は。。。
この男の妻だった
そして、この強盗は
彼女の護身用ロボット。。。タイプ　Ｄ３。。。

「本当は、ちょっと懲らしめようと思って
　ロボットに強盗に入るように頼んだんだけど
　こうなって、かえって好都合だわ。

　守ってくれるはずのロボットに殺されたんだから
　ロボットの製作会社からは
　たんまり賠償金がもらえるだろうし
　なにより、またこの家で暮らせる。

　それにしても。。。
　あなたは完璧なロボットだわ。」

　あなたは完璧な出来ソナたね。」

女は、Ｄ３を見つめる

「ありがとうございます。
　でも、大したことはしておりません。
　また、お役に立てるよう。。。
　日々、精進していく所存です。
　これからも、どうぞよろしくお願いします。」

Ｄ3は、とても穏やかな声でそう答えた
このロボットには。。。
「執事機能」の設定がしてあった

長年、夫に罵られ続け
女の心は、深く傷ついていた

そんな女にとって
決して、威張らず。。。
いつも一歩下がったところから
持ち主を見守り続け
誰かをバカにしたり
責めたてたりしないこの機能は
とても魅力的だった

そして、今度は
そこに倒れている男のほうに
向き直る

もう、この世のものではない男に向かって
女はこんなことを言った

「私は、あなたのこと好きだったのよ
　あなたは、文句を言いながらも
　私を愛してくれているんだと思っていたから
　あのカップを壊してしまった時
　そうじゃないってことがわかったの
　あのカップは命より大事だって言ってたでしょ
　私より大事だったのよね
　大切な人に貰ったカップ。。。だから

　でも、あなたには。。。
　カップを大切にする心しか残ってなかったのね

　『そのカップは、大切な人からもらったんだ
　君より大切な人に。。。
　だからそのカップは、
　僕にとっては君より大切なものなんだ
　それを割ってしまうなんて。。。

　出て行け！！！
　いますぐ、この家から出て行け！！！』

　あなたにそう言われたときは
　心が凍ったわ

　思ってもみなかったのよ

思ってもみなかったわよ
昔、そのカップを贈ったのが私だってこと
あなたが忘れてしまっていたなんて

結婚前のあの頃の私が
あなたは今も好きなんでしょう

今ここにいる。。。目の前の私じゃなくて。。。

そりゃ、失敗も多かったけど
ずっとあなたのために尽くしてきたのに
それがとても悲しかった。。。

でも、いいわ。。。
私には、Ｄ３がいる。。。
彼がいれば。。。
夫なんていらないしね。

それにしても、ロボットがミスをするなんて。。。
『お茶目機能』設定がしてあったのね。
あんなに失敗をすると怒っていた人が
わざと失敗するようにロボットを設定するなんて
可笑しな話。

そういえば。。。昔。。。

新婚の頃。。。
何か失敗したとき
ペロッと舌を出して謝る姿が愛おしいって
言ってくれたことがあったわね

まぁ。。。
今となっては、どうでもいいことだけど。。。」

女とＤ３は。。。
ロボット製作会社に連絡をするために
部屋の外へ出ていった

●　●　●

男は、軽い認知症を患っていた
まだ、本人も気づかないほど初期のもの

普通通りの生活は出来る
ただ。。。
妻と出会ってから
結婚して。。。1年間位までの記憶だけ
曖昧になってしまっていた

ちょうど。。。
あのカップを妻から貰ったころの記憶

そのことに男自身
気づいてはいなかったが。。。

病気が、記憶を奪っても
そのカップを貰ったときの嬉しさだけは

でも男がプレゼントした時の喜びは
忘れずにいたのだろう

だから、妻がカップを割ったとき
あれほど、怒ってしまったのかもしれない

家事ロボット。。。『タイプ　Ｔ３』は
結婚した頃の男の妻に
実は、とてもよく似ていた

この会社のロボットは
持ち主の好みを統計的に調べ
少しずつ、学習しながら
持ち主の理想に近づくように
バージョンアップするようになっていた

結局、男の理想は。。。妻だった。。。
ということになる

けれど、それを知るものは
今となっては誰一人いない

ドアの閉められたリビングの中では
動かなくなった男と
動かなくなったロボットが

２体並んで。。。

静かに静かに
ころがっていた。。。

おしまい